様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　２４　年　　５月　　１日現在

機関番号：15401
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2009　～ 2011
課題番号：21830074

研究課題名（和文）　生徒の生活満足度（幸福感）に関する国際比較教育調査－先進国・途上国の事例から－

研究課題名（英文）　International and Comparative Education Study on Students' Life Satisfaction (Happiness) -Cases from Developed and Developing Countries-

研究代表者
櫻井　里穂　(SAKURAI RIHO)
広島大学・教育開発国際協力研究センター・准教授
研究者番号：50509354

研究成果の概要（和文）：
本研究は、生徒の満足感（「家庭」「学校」「友達」「コミュニティ（住環境）」「自分自身」に関する）に文化差が見られるかどうか、また中進国・開発途上国において働きながら学校に通う子どもたちと学校だけに通う子どもたちの自尊心に違いがあるかどうかを検証したものである。本研究は、昨今注目されている「幸福感」や、グローバリゼーションの影響により複雑化している児童労働の研究にも一石を投じた研究である。

研究成果の概要（英文）：
This study explored whether there are any cultural differences in student life satisfaction with regard to "family," "school," "friends," "living environment," and "self." The study also examined whether there are any differences in these perceptions between working students and non-working students in transitional as well as developing countries. The study caused a surge in the increasing number of studies on happiness and child labour that have been complicated due to the influence of globalization.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	0	0	0
2010 年度	1,070,000	321,000	1,391,000
2011 年度	960,000	288,000	1,248,000
年度			
年度			
総　計	2,030,000	609,000	2,639,000

研究分野：比較国際教育学・教育開発

科研費の分科・細目：社会科学・教育社会学

キーワード：自尊心、中学生、先進国・途上国、働く子ども、幸福感、学校、家庭、生活満足度

１．研究開始当初の背景

1990 年代以降「人間中心の開発」が注目され、またポジティブ心理学の設立により、「主観的幸福（相対的幸福感）」や「生活満足度」「生活の質（Quality of Life）」に関する研究は増加の一途をたどった。例えば、2000 年以降、2010 年までの 10 年で、主観的幸福に関する経済学・開発学系の研究は 1400 を超え、それ以前の 30 年間の研究の約 3 倍以上となった。こうした多くの研究は幸福感・福

祉(well-being)の相対的側面や幸福感や生活満足度の計測方法などであり(c.f. Oishi, et al, 2007; Biswas-Diener, & Diener, 2006)、幸福感に社会・文化差があると注目している研究が多い(Oishi, 2000; Arrindell & Veehoven, 2002; Kusago, 2007)。一例として、7000 人の大学生を対象とし研究調査を行った Oishi (2000)は、幸福感や well-being の感じ方に文化差を見出し、概して個人主義の国では自分の目標達成時に幸福感を感じるのに対して、集産主義（人間関係重視）の国では他人との関係性を良好に保つことに幸福感を感じる、としている。しかし、こうした多くの幸福感に関する研究の調査対象は大学生以上や成人であり、中・高校生以下の国際比較研究は、例えばユニセフ（2007）の OECD 先進諸国を対象とした「子どもと青少年の幸福度調査」など少数の研究に限られている。

一方、途上国の教育開発研究も人間開発が注目された 1990 年代以降、EFA〔万人のための教育〕の影響も受け盛んになり、日本でも 1990 年代以降、大学院での国際教育協力の研究科が増加した（黒田・横関、2005）。ところが途上国の教育研究は、学校の在籍率や中退率、教育の質やその他のインフラ面等が先進国とは違いすぎると考えられ、先進国の教育研究問題とは完全に切り離されて研究されてきた傾向がある。

しかし昨今、最貧地域とされる東アフリカでも、初等教育の無償化・義務化の影響や、グローバリゼーション・経済発展の影響をもろに受け、格差が広がり、社会が変わりつつある。一例として、ケニアの中学教諭である Wandera 氏は、2009 年 3 月の米国比較教育学会で「ケニアの教育現場は今、かつてない移行期にあり、英語とスワヒリ語を混ぜて喋ることが流行ったり、明らかに教育現場に国際化の波が押し寄せている」（米国比較国際教育学会、2009 年 3 月）と報告している。また、ガーナの 2000 年初頭からの TIMSS（国際数学・理科教育動向調査）参加などに見られるように、途上国の教育成果も国際的な枠組みで比較研究され出している。

一方で途上国の場合、いまだ半分以上の子どもたち（53%）が中等教育を受けていない現実があり（EFA グローバルモニタリングレポート 2009)、また、教育の質に問題がある場合も多い。途上国の子どもたちにとって学校は生活の一部であり、学校に通いながら労働に従事している子どもも多い。同様に、中進国でも社会階層や地域によっても子どもの生活環境は大きく異なっており（Boyden, 1999; Sakurai, 2006)、学校に通いながら同時に労働に従事している子どもたちも少なくない。このように途上国でも教育格差が生じ、従来の「先進国」「途上国」という切り口だけではもはや教育一般問題は語れなくなっている。本研究はこうした多様な生活形式を営む世界の中学生(第 8 学年、第 9 学年にあたる生徒）を対象とした幸福感・生活満足度の国際比較教育調査研究である。

２．研究の目的

近年、特に盛んになってきた途上国の教育開発は、その現状や目的の違いから先進国の教育とは切り離されて行われてきた傾向がある。しかし国の経済レベルにかかわらず、国家による「学校への出席あるいは教育課程の履修」（杉本、2009）という義務教育段階の生徒が、「家族」「友達」「学校」「住環境」「自分自身」「労働」という側面のどういう点に満足感（幸福）を感じているかを、偏見を超えて社会科学的に証明することは大切である。本研究の意義は、先進国と途上国の総合的な比較国際教育研究調査であり、本研究が「その関係性を明らかにしようとする」比較教育学的側面にとどまることなく、先進国と途上国の教育の総合的研究という従来とは異なる新たな独自の視点を提供する教育開発学的側面との融合研究である。

さらに、本研究の意義は既成のデータ分析（定量的研究）に終わるのではなく、研究代表者自らが、自分の足で現地の学校調査を行う定性的（質的）調査を含むことで、「言葉にできないその場の雰囲気や状況」（澤村、2008）をも多面的に読み取ることのできる研究である。

以上を踏まえながら、本研究の具体的な目的は以下 2 点である。1 点目は中学生の幸福感・生活満足度にどのような国別、文化別の傾向が見られるかを質問紙調査やインタビューにより検討することである。2 点目は、主に途上国において学校に通いながら働く生徒から自分自身の労働に関する見解を聴取し、特に、学校だけに通う生徒と比較して、自尊心や学校への影響（評価）にどのような違いがあるか、また、文化的な傾向があるかどうかを探ることである。

今日、教育の社会階層化が進み、より子どもの実態に即した幸福度調査や教育現状把握が必須とされる。本研究は世界の教育研究の架け橋として、比較教育の分野だけでなく、国際理解教育や教育開発、開発教育の分野にも貢献できるものである。

３．研究の方法

本研究の主とした研究方法は、現地で行うインタビューと質問紙調査である。質問紙項目にはアメリカ、サウスカロライナ大学のHuebner 教授グループ陣により開発された「多次元による生徒の生活満足度尺度」Multidimensional Students' Life Satisfaction Scale、以下、MSLSS, 1994）を主に用い、労働に関する項目を加えた。調査国ではそれぞれ首都圏もしくは日本の場合、政令指定都市にある公立の中学校（第８学年、第９学年にあたる生徒もしくは児童を含む）を調査対象とした。各国での調査は基本的に首都で行うが、その理由として、本研究の主目的が多国間の比較であるため、調査の利便性と学校選択の一般化の観点からである。また、学校選択は、概ね平均的な公立の学校（複数校）を対象とする。

使用言語は英語を基本とした。ブータンでは就学前教育から授業を英語で行われているためゾンカ語より英語の方が読み書きが流暢な子どもが多く、英語に関して全く問題なかった。ケニアにおいては、英語を習い始めるのは早いが、英語での授業は、小学４年生からとなるため、英語での調査に若干不安を覚える子どもも見受けられた。従って、調査２日目からは、ケニア人のリサーチアシスタントをつけ、調査時に英語をスワヒリ語に訳しながら調査を行った。なお、日本の調査は日本語で行った。

分析には、記述統計や多変量解析など統計的手法を用いた。

４．研究成果

国際的教育調査の観点から、国ごとの調査結果を簡単にまとめると、ケニア、ブータン、日本では、中学２年生（ケニアの場合、８年生は小学生に当たる）が自分の自尊心を高めるには、「友達」が大切であることが分かり、これはどの国にも共通して言えることであった。中学生の学齢期の子どもたちにとって、学校では、友達がとても大切な要素であることが分かった。

また、児童労働の観点からは、ブータンとケニアで子どもの労働の有無（働きながら学校に通っているか、学校だけに通っているかどうか）により自尊心に違いがあるかを見たところ、ブータンにおいては、働くことで子どもたちは自分の自尊心を高め、かつ「学校」に関する項目群に対しても良い影響があることが分かった。これは、2008 年に同国で行った調査とほぼ同じ結果となった。

一方で、ケニアでも「働くことで家計に貢献している」という意識を持つことは、学校に関する項目に対してプラスの影響があったものの、実際の労働時間（一週間に何時間働くか）は、学校に対してマイナスの影響が見られた（表１・２を参照）。ブータンとケニアとの違いはおそらく子どもたちの働く環境（ブータンでは子どもたちはほぼ全員親の保護下で働いている）がその一因と考えられる。

表１　ケニア都市部の子どもの「自尊心」の向上を予測する生活満足度の変数による重回帰分析

変数	非標準化係数Ｂ	標準誤差	*標準化係数ベータ*
家庭	0094	0.037	0.137*
友達	0.161	0.031	0.273***
学校	0.095	0.042	0.116*
住環境	0.036	0.025	0.079
労働意識	0.011	0.018	0.038
労働誇り	0.003	0.016	0.012
労働時間	-0.001	0.001	-0.032

注：R2 乗=0.21（N=367, p<0.001）

表２　ケニア都市部の「学校」に関する項目を予測する生活満足度の変数による重回帰分析

変数	非標準化係数Ｂ	標準誤差	*標準化係数ベータ*
家庭	0.032	0.046	0.038
友達	0.121	0.039	0.169**
住環境	0.077	0.031	0.141*
自尊心	0.145	0.065	0.119*
労働意識	-0.039	0.022	-0.107 (0.74)
労働誇り	0.071	0.019	0.228**
労働時間	-0.003	0.001	-0.091 (0.057)

注：R2 乗＝0.19(N=367, p<0.001)

昨今、児童労働に関しては特に、「学校」か「労働」か、2者択一的に問う研究が多いが、途上国の多くでは、中産階級以下の家庭の子どもたちは学校にも通いつつ、労働にも参加していることも多く、また、他の友達と過ごす時間もあり、生活はより複雑である。本研究は、児童労働を含めて、子どもの生活をより包括的に分析し、「学校」「家庭」「友達」「コミュニティ」「自尊心」などに与え

る影響や、そこから得られる満足感（幸福感）を働く子ども、学校だけに通う子どもと比較し、さらにそれを国際比較した研究であるが、複数の国の比較の観点からは、中学生にあたる学齢期の子どもたちにとって「友達」というものが自尊心に対していかに重要であるかが分かった。これは世界各国共通であった。また、児童労働の観点からは、子どもの労働が自尊心にどう影響し、また、学校にもどう影響するかは、その労働内容にもよること、（親と一緒に働いているかどうかなど）が分かった。そして、ケニアなどでは「家計に貢献している」という自負心を持つことは学校などに対しても良い影響がある一方で、実際の一週間あたりの労働時間は、必ずしも学校に対する項目群に良い影響はなく、労働時間が増えれば、学校にはマイナスの影響が見られた。このように子どもによる労働にはその影響が、家庭へ貢献しているという自負心は向上させても、学校教育に関してはマイナスな面もあり、労働時間や労働分野なども含めて注意深く検討していく必要がある。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）
① SAKURAI, Riho (2012). “Preserving National Identity and Fostering Happiness in an Era of Globalization: A Comparative Exploration of Values and Moral Education in Bhutan and Japan.” *Journal of International Cooperation in Education.* Vol. 14. No. 2 (in press) 査読有

②櫻井里穂（2009）「ブータンにおける青少年の生活満足度に関する一考察―働きながら学校に通う子どもの自尊心に注目して―」『国際教育協力論集』Vol.12. No.2 p.143-153. 査読無

〔学会発表〕（計５件）
① SAKURAI, Riho “Working Children’s Effects on Their Family, Friends, School and Self-Esteem: A Case of 8th Graders in Kenya.” April 26th, 2012. San Juan, Puerto Rico, USA.

② SAKURAI, Riho “Cross Cultural Life Satisfaction Survey among Tertiary Students.” 日本比較教育学会 第 47 回大会 2011 年 6 月 24 日 於、早稲田大学早稲田キャンパス

③ SAKURAI, Riho “Africa-Asia University Dialogue for Educational Development: Collaborative Research on Educational Development among Twenty-Eight Universities in Africa and Asia.” May 3, 2011. 55th Annual Conference of the Comparative and international Education Society. Montréal, Canada.

④ 櫻井里穂 「働く中学生の自尊心に関する一考察－ブータンの事例から－」国際開発学会第21回全国大会 2010年12月4日 於、早稲田大学 大学院アジア太平洋研究科他

⑤ SAKURAI, Riho “Adolescent Life Satisfaction in Bhutan: the Case of Working Children” 日本比較教育学会 第45回大会 2009 年 6 月 27 日 於、東京学芸大学

〔図書〕（計２件）
① 勝間靖編著（2012）ミネルヴァ書房「テキスト国際開発論」貧困をなくすミレニアム開発目標へのアプローチ」『第 10 章 初等教育』(p.192-209) 櫻井里穂

② 二宮晧（監修）メディアファクトリー「こんなに厳しい世界の校則」（2011） 【メキシコ】執筆協力（p.80-81; 140-141; 150-151; 179-181）櫻井里穂

〔その他〕
ホームページ等
該当なし

６．研究組織
(1)研究代表者
櫻井 里穂 (SAKURAI RIHO)
広島大学・教育開発国際協力研究センター・准教授

研究者番号：50509354

(2)研究分担者
該当なし

(3)連携研究者
該当なし